

旭 医療生協



貧しい人々の手に医療を

貧者の一灯を寄せ合い 診療所建設を

戦後十年近くを経たころ、「健康保険証による診察お断り」、あるいは健康保険証で受診しても保険がきかない時代がありました。お金の心配が先にたち、庶民はよほどのことがない限り、医者にはかかれませんか。だからこそ安心してよい医療を受けたいと多くの人が願っていました。当時、診療所のある旭区西部の赤川・生江や都島区大東・毛馬一带は木賃アパートや小さい長屋が立ち並び、淀川や運河沿いには掘立て小屋が点在している低所得層が多く住む劣悪な生活環境にありました。また栄養失調による死亡や行き倒れの人も



新診療所移転前の赤川診療所（2005年）

半、奥行一間半の狭いながらも物件を探し当て、新年を新しい診療所で迎えることができました。一九七五年、創立二〇周年に都島医療生協が設立されたのを機に名称を旭医療生協に改めています。一九七八年にはさらに広いスペースと充実した医療機器をと現在の場所に移転しています。

しかし、経済的な問題から日本生協連医療部会への加入は一九八〇年まで待たねばならず、全国方針からほど遠い存在でした。全国では理事会の活発な活動で、組合員が運営に参加し組合員拡大や増資運動をどんどん進めていきました。一九八五年から保健教室、生協学校、役職員の一泊研修会などを開催し、一九八八年から毎年の組合員交流集会や患者会活動も定例化させました。旭生活と健康を守る会や公害患者会などの交流のもとに大気汚染調査、一人暮らし食事会などにも取り組みました。一方、医療の現場では次々と医療切捨て政策の影響を受けています。健保一割負担の導入、老人保健法による自己負担の導入と引き上げ



新赤川診療所建設まつり（2005年）



診療所前で開設当時のメンバー

さほど珍しくない地域であり、また時代でした。そういう背景の下で「誰でも安心して診てもらえる自分たちの診療所をつくろう」という願いが広がりました。一九五四年三月、「皆で少しずつお金を出し合えば診療所ができるそうや」と誰からともなく医療生協の設立相談が始まり、在日朝鮮人も多く集まり設立発起人会を発足させ、組合員三〇〇人が百円、二百円と持ち寄って、何とか出資金一〇万円を集めました。十月には旭都島医療生活協同組合設立総会が開催され、当時の城北朝鮮初級学校の一角を提供してもらえることになりましたが、翌年四月になっても医療生協の認可が下りず、仕方なく高洲診療所（高洲斎所長）とい

もあり、国民が医療にかかりにくい状況になりつつありました。そして、一九八九年の国民健康保険証の未交付により手遅れとなった事件は広くマスコミにも大きく取り上げられました。一九九三年には、入院病床数規制の厚生省（当時）方針により地域でも頼りときれていた城北市民病院が、医療生協も中心となつて闘った地域住民による大きな反対運動に背を向ける形で閉鎖されました。

「変わってから合併」 合言葉に累積赤字を解消、 そして診療所建設

一九九二年、二千世帯を達成した頃より、組合員の手による医療生協運動がようやく軌道に乗り始めました。翌年、利用委員会を発足させ、毎月定例化させることで、「医療生協の『患者の権利章典』」実践の端緒をつかみました。一九九五年、待望の常勤所長が民医連人事により派遣されましたが長くは続きませんでした。それが組合員活動にも影響したのか、創立四

う個人診療所として開設しました。府庁とも粘り強く交渉を続け、半年後ようやく医療生協が認可され、一九五五年九月、赤川診療所が開設されます。貧富の差や国籍による差別のない親切でよい医療を提供する民主医療機関連合会加盟院所として、地域住民のかりやすい診療所をめざしてのスタートでした。

ようやく自前の診療所の 確保と医療部会への加入

一九六一年秋、借りていた朝鮮初級学校が移転することになり、新たな拠点の確保が求められるようになりました。その結果、現診療所の五〇メートル先に間口二間

〇周年を迎えても組合員二千七百世帯に止まり、支部や班も活動していませんでした。

しかし、合併に向けて「変わってから合併」を合言葉に、支部、班を大急ぎで組織しました。当時は、「赤字は絶対出さない、累積赤字もなくそう」くやしい想いはしたくない「いいとこがしをしよう」「元気づくり、健康づくりをしよう」と職員、組合員が燃えに燃えた活動を展開した時期でした。健診受診率を高めよう、毎月患者件数八〇〇件維持達成させよう、ヘルパーステーションをつくろう、トイレもエレベーターもない診療所三階にデイケアを立ち上げようとなりました。大宮介護センターも自分たちの手で成功させ、合併の日にスタートできました。累積赤字も何とか解消することができました。

そして、新しい診療所建設に取り組んでいる今こそ当時のがんばりを思い出し、職員と組合員が団結し、夢を語り、大事業を成功させることで地域でのいっそうの存在感を勝ち取ることができるのです。